



野沢 巖 教授

## 野沢巖教授のご退職を記念して

大保木輝雄\*

野沢巖教授は平成22年(2010)をもって定年退職となり、埼玉大学教育学部在任37年間を終えられる。ここに先生の退職を記念し、野外研究室の歩みを四期に区分し、先生の教育と研究の成果を振り返りながら後進の参考とすべく一文をしたため敬意を表したい。

### 1 野沢研究室の開設と野外活動体験

昭和48年(1973)4月1日、野沢(28歳)は埼玉大学教育学部に、スキー、水泳、登山、キャンプを中心とした野外運動学の専門家として赴任した。当時、その意気込みを次のように綴っている。

「思えば中野工業高校時代から教育大時代を通じてこの日の自分はおよそ想像のつかないものだった。世界を放浪したのも、スキーをやったのも、いやその前に陸上競技をやったのも、すべてがよい方向に働いた。人々に恵まれ、考えてもみなかったこの日の自分があった。頑張らねば、これからが大変だぞ、精一杯やるだけだ、様々な想いに決意を新たにした。無我夢中の1年だった。飯山国際でのスキー実習が強い印象として残っている」(『野外研十年史』)

相部屋の研究室でのスタートだった。

翌49年、野沢は早速、新進気鋭の非常勤講師2名を迎え、スキー実習の場所を飯山から八方尾根スキー場に移し刷新をはかった(後にスキー実習は学内でバス2台を仕立て、野外研究室の学生、体育学科の教員をスタッフとして指

導に当たる名物科目となった)。非常勤講師をお願いした新潟大学の土方先生、福井大学の清水先生は学生時代から共に野外運動学の新生を目指した同志でもあった。(この年、野沢は全日本スキー連盟公認基礎スキー指導員資格、翌50年には日本キャンプ協会公認上級指導員資格を取得している。)

すさんだ高校生を雪山に連れて行き、雪洞生活体験をさせて、笑顔を取り戻させたり、山を切り開きすべて一人で山の家を作ったり、新潟港からカヌーで日本海を縦断させた土方先生。またスキーの技術構造解明に明け暮れ、実践的立場からスキー操作の技術を実に単純な動きに還元し、全ての技ができるスキーロボットを完成し、スキー界を「アッ」と言わせ、オーストリアスキー界の大御所クルッケンハウザー教授をして「コロンブスの卵だ」と唸らせた清水先生。後に野外教育の様々な領域で活躍されることになった両先生方を迎えての実習であった。

その他、当時の東京教育大学野外運動研究室の面々は野外運動学の各分野で実践と研究を積み重ね、次々に新たな提案を世に問うている。単に、スキー、水泳、登山などの技術を教えるのではなく、それらの実践を介して大自然の営みを体全体で感得し、大自然のなかでの生活実践を通じて日常生活を捉え直す営みが野外活動だという視点に立った教育が模索されていたのである。そのような研究仲間との協力関係を背景に野沢研究室(野外運動研究室)は開かれたのである。

\* 埼玉大学教育学部保健体育講座

いつも笑顔で行動力抜群、夏も冬も日焼けし

颯爽としていてファッショナブル、女子職員の憧れの的、加山雄三ならぬ「埼玉の若大将」と呼ばれていたのが野沢巖であった。

昭和51年、講師への昇格にともない野沢研究室が発足し、女性4人の研究室生を迎え入れ、翌52年、1教官1研究室となり、B棟1階体育第二演習室を仕切って念願の野沢研究室が誕生した(56年7月、H棟に移転)。野沢研野外活動は本格的に開始されることになった。

野沢研は他の研究室とは趣を異にし、人々の出入りが多く、活況を呈した。「埼玉のオアシス」「喫茶野外」などと評されるほど自由で誰もが気軽に立ち寄れる雰囲気をもった研究室づくりがなされた。その研究室に新たな室生4名が加わり8名のスタッフとなった。このスタッフと共に埼玉周辺の児童を対象に夏の林間学校と冬の林間学校がスタートしたのである。その間、49年には、学生3名と「埼玉パウロ」を結成しキャンプ活動のリーダーとして他団体のキャンプに参加。50年には、水泳実習開始、「エーデルワイスクラブ」を発足させ、スキー実習、スキー教室を活性化させていた。

53年には、登山行事、キャンプ行事、林間学校、臨海実習、サイクリング、OL、スキー行事など年間十数回の野沢研野外活動の基盤が整備されていった。その後5年間をかけて活動内容の充実と強化が図られた。

特に注目されるのは、研究室の初心者を引き連れて槍ヶ岳登頂を成功させ、本格登山が開始されたこと、研究室生の海外放浪や研究室OBなどを含めた海外ツアーが開始されたことなどである。また、埼玉県教育委員会の依頼によるハイキング(54年)を皮切りに、スキー、キャンプなどの教育番組の作成に協力し、テレビ埼玉で放映されたことも特筆すべきであろう。その後も野沢研の活動は、学外にむけて発信され続けることになる。

赴任して10年間の野沢の活動や、野沢研での体験を、教え子達は次のように綴っている(以下『野沢研20年史』より抜粋)。

昭和52年(1977)入学のN女史は「入学式の日、こんなに若くてカッコイイ先生がいるなんて!と胸をときめかしたのは、他でもない野沢先生のこと、大好きな野沢先生と仲間との出会いがなかったら、自然と友を大切に余暇を楽しむ今の私はなかったでしょう。野沢研究室に入って本当に本当によかった!!」とべた褒め。

同年入学のM氏は「野外研で見えるもの、聞くもの、そして行なうことのすべてが、私にとっては新鮮で生きる活力でした。……野外研の真髄は〈毎日楽しく過ごすこと〉と言った先生の言葉を今も思い出しながら、子育てに追われながらも、日々の生活に夢を馳せ、楽しみを思い出しながら生活しています」と研究室での得がたい体験が生活術となっているという。またヨーロッパ放浪の旅に出た同期のS氏は「子は親の背を見て育つと言いますが、野沢先生と僕ら研究室生たちとはまさにそれだったように思います。僕たちの間いかけには、いつでも手を止めて耳を傾けてくれました。そして、先生は多くを語らず、まずは何でもさせてくれました」と言う。両人とも野外研での体験は「宝物」と断言している。

初心者で槍ヶ岳に登った53年入学T女史は55年9月、「頂上に登ったとき、先生が〈初心者をごろごろつれて槍に登ったぞ、やればできるんだ〉ということをごだれかに言うんだと叫んでいました」と野沢の喜びを伝えている。

ベテランでも難しい槍の頂上に9名全員に登頂させ、絶大な達成感と大なる自信を植え付けた。一步踏み誤れば滑落、命取りとなる。野沢の勇気と決断、そして緻密な段取りによって実施されたこの登山の成功は、その後の研究室の指針ともなった。前述のT女史は自然とのふれあいを通じて「自然の驚異」と「自然に対する畏敬の念」を感じたと吐露している。このような気持ちは、野沢研の学生全員が体験することであった。そして、大自然のなかで苦楽を共にする生活を通じてお互いの絆が強くなることも実感していくのである。天候を含む大自然を

相手に営まれる野外運動ならではの学習の意義がそこにある。

## 2 野外活動教育と研究

新たな10年に向けての活動は、58年（1983）、群馬県みなかみ市藤原に開設された野外活動施設「チロル館」の開設をもって、あらたな展開を迎える。学生の教育者としての資質向上に力点がおかれ、特にスキー技術の向上が目指された。

野外研の学生はスキー1級取得が当たり前のようになり、スキー実習での検定も盛んになった。合わせてどのようにすれば早くスキーの技術が習得できるのか、その指導法手順などの実践研究が着手され、『埼玉大学紀要』、『野外運動研究』、『日本スキー学会誌』などで成果が発表された。キャンプ教室、春休みキャンプ教室、子供スキー教室も充実し、学生が企画運営する取り組みも本格化するのである。また、61年には新たにカヌー実習が開始された。この年、野沢は全日本スキー連盟公認基礎スキーB級検定員となる。

体育専修でありながら英語教師をしている57年入学のM氏は、野外研で学んだことは「自然の中にいるときは、人は一番輝いている」ことだと言う。「自然の中ではとても素直な気持ちになれ、様々な人と心から話し合うことができ、自分のビジョンが広がったように思います。キャンプやスキーでの子供たちを含め、たくさんの素晴らしい人達と出会えたこと」が一番心に残っているという。「アウトドアスピリッツを忘れずに、自然を愛し、人を愛せる子供達を育てていきたい」とも述べている。また、教師への希望を持たないまま野外研に所属したE氏は「キャンプやスキー、登山にオリエンテーリングと多くのことを体験し、少しずつ自分の気持ちも変わっていったようです。その中でも、子どもたちと過ごした、あの〈キャンプ教室〉の影響が一番でした。素直で元気な子どもたち

と行動する楽しさを知ったから、今の自分があるのだ」と言っている。現在、大学で野外活動の教鞭をとっている59年入学のF氏も「子供達の目の輝きが特に印象的で、『野外』を続けることになった要因」と述べている。

野外運動の実践と発展にとって必要不可欠なことは「分身を作ること」だと野沢は言う。この時期は、62年入学のY氏によれば「(研究室は)素晴らしい眺め、整理整頓された室内、充実した設備に目をみはった。私の在学時にはワープロが一机一台となり、コピー機・電子レンジ・ソファベッドが入り、絨毯が新しくなった」居心地の良い暖かなところで、定番の野外行事の他に「キャンプ協会やスキー学会の仕事、様々な行事の準備」をしたことを記し、先生は「時には冷ややかに愛情をもって見守って下さった」と述べる。

また、キャンプへの参加も単にカウンセラーとしてではなく、キャンプを創り上げる側にまわった63年入学のK女史は「野沢先生はくこうあるべき、くこうでなければならない」といった強制的な方法をとられなかったので、かえって私達自身で考えて工夫する必要がある、キャンプ中のそれぞれの活動にも熱が入りました」と当時を振り返っている。多くの分身が育っていった時期と見ることもできる。

この時期に研究された成果は、平成2年（1990）に設立された日本スキー学会で発表された。また、野沢はスキー学会の推進役として理事長に就任している。

## 3 野沢流野外運動の確立

20年間培ってきた野外研の学生とOBと共に歩んできた野沢は、様々な研究成果を基に独自性を発揮しはじめた。超スキー練習法の確立や着衣泳の指導など新しい指導法を世に問うことになったのである。

平成6年（1994）から5年間に渡って「誰もが安全に楽しく確実に技能が向上するスキー指

導について」というテーマで研究が推進され平成10年(1998)に「誰もが安全に楽しく確実に技能が向上するスキー指導について(5)―超スキー練習法の特徴について」を『日本スキー学会誌』に発表した。これは先に紹介したスキーロボット作成に成功した清水スキー理論の指導法版ともいえるものである。初心者にありがちな腰折れをなくし、腰を高い位置に保ち浅い回転をしながら「滑る」技を早く習得させる指導法が開発された。

また、この時期には、冬季実習はスキーばかりでなくボードの導入、ゼッケンの撤廃など埼玉大流の実習へと変化していったのである。

スキー研究の一方、夏季には新たな課題として「着衣泳」の実践や研究にも着手していた。詳細については本誌掲載の野沢巖『着衣泳物語』を参照されたい。それによれば、この課題は昭和52年(1977)の小学生キャンプ教室で、小学生が増水した川に流され、スタッフ共々救助にあたった時の経験が契機となったという。着衣状態での水泳がいかに難しいか実感させられ、着衣泳研究の必要性を感じ、1979年、野外研所属の学生が「水中における自己保全能力について」という課題に取り組み、昭和55年(1980)以降、「体育教材研究」の授業で着衣状態での水泳を取り入れ、地道な活動を続けてきたのである。このことがマスコミに取り上げられ、1990年以降着衣泳指導の第一人者として、野沢は精力的に出張指導に当たった。平成6年(1994)8月、「クローズアップ現代―泳げる人がなぜ溺れるか。着ている服が命を奪う」で野沢の着衣泳が放映され、着衣泳の必要性が世に広まった。その後、野沢は1995年と1996年に「着衣泳の指導に関する研究」、「衣服が大学生のクロールと平泳ぎ100泳のタイムとストローク数に及ぼす影響」を発表した。これらを基に、ビデオや書籍での普及が図られ、平成11年(1999)には学習指導要領にも取り上げられ、学校教育に定着させることとなった。多忙な日々を送りながら、野沢は地域スポーツ指導者A級スポーツ指導員

(スキー)、野外活動指導者(キャンプディレクター1級)の資格を取得している。

平成11年といえば、今は無き健康スポーツコースが開設された年である。8期生まで続いたコースであったが、野沢は戸部、大保木とともにそこに移籍し、学生の指導に当たった。1期生から3期生までは、2年次の子供林間学校、3年次の子供スキー教室のカウンセラーとして参加し、子供たちと生活を共にしながら多くのことを学んでいった。教職に就いている卒業生は、その体験が現場に生きていると言う。野沢が平成15年(2003)4月から18年3月まで附属小学校校長職に就いたため、この行事は残念ながら継続できなくなってしまった。

#### 4 体験こそ教育の原点

野沢に先立ち退職され、水泳実習、スキー実習の良き協力者でもあった塩入(49年着任)は口癖のように「巖(がん)ちゃんは偉いな。いつも褒めて学生を育てる。見習わなければ。」とつぶやくように言われていた。

野沢は、多くの人との出会いと自然体験のなかでおのずと鍛え上げられた「生きる力」への確かな気づきに裏打ちされた、教育への強い信念を早い時期に会得していたのではないかと。

附属小校長の任期を終え、去るに当たって綴られた野沢の手記には、体育の教員を目指した理由が以下のように記されている。

「進学した高校で運命的な出会いがあった。すばらしい体育の桑原先生に出会ったのだ。『野沢君、君は体育教師が似合う。才能は十分だ』という言葉で、私の目標は決まった。

努力の甲斐あって、私は東京教育大学体育学部にて現役合格した。それからしばらく経った大学生活三年目に、私は重大な決断をした。

『大学を休学して世界を回る。今しかできないことをしたい』。大学三年終了と同時に休学し、世界旅行の準備をした。そして、シベリア鉄道経由ウイーン行きの切符と、インドのボンベイ

から横浜までの切符を買い、わずかのお金を持って日本を旅立った。ヨーロッパをヒッチハイクしながらの仕事探し、インスブルックでのペンキ屋での資金稼ぎ、船員になるためのヒッチハイク、ドイツ貨物船での世界旅行。二年半で五十カ国以上を回った。

大学に戻った私に、指導教員の梅田教授が言った。『君は大学教員を目指せ。学生が喜ぶ

教員になれる』。私は努力して埼玉大学教育学部の教員となった。』

良き出会いと縁、そして冒険。野沢の野外活動の源泉はそこにあるのではないか。「体験は価値観を形成し、その人の行動を左右する。大切な体験は教育としてなされるべきである」という野沢の信念は体育の原点でもある。それを重く受け継ぎたい。

## 略 歴

氏 名 野 澤 巖

生年月日 1944年10月23日

現住所 東京都東村山市廻田町 2 - 16 - 2

## 学 歴

1970年 3月 東京教育大学体育学部体育学科卒業  
1970年 4月 同上大学院体育学研究科修士課程体育学専攻入学  
1973年 3月 同上 修了  
1973年 3月 体育学修士（東京教育大学）

## 職 歴

1973年 4月1日 埼玉大学助手教育学部  
1976年 11月1日 同上 講師教育学部  
1980年 2月1日 埼玉大学助教授教育学部  
1995年 4月1日 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科併任 現在に至る  
1997年 4月1日 埼玉大学教授教育学部 現在に至る  
1997年 4月1日 埼玉大学大学院教授教育学部（併任） 現在に至る  
2002年 4月1日 埼玉大学教育学部附属小学校長（併任）（2005年3月まで）

## 所属学会等

1972年 4月 日本体育学会（現在に至る）  
1973年 4月 日本レジャー・レクリエーション学会（1995年まで）  
1973年 4月 大学スキー研究会（現在に至る）  
1975年 5月 社団法人日本キャンプ協会（現在に至る）  
1985年 4月 日本バイオメカニクス学会（現在に至る）  
1986年 4月 NPO法人埼玉県キャンプ協会（現在に至る）  
1989年 4月 日本野鳥の会（現在に至る）  
1990年 5月 日本環境教育学会（現在に至る）  
1990年 5月 関東地区大学テニス研究会（現在に至る）  
1990年 12月 日本スキー学会（現在に至る）  
1997年 10月 日本野外教育学会（現在に至る）  
2005年 5月 埼玉県体育学会会員（現在に至る）

## 研究業績

### I 著書

- 1.1979年 10月 「ゲーム、水泳」『体育科教育の研究』（小学校体育科教育研究会編）、建帛社、第2章、pp.44-47、67-73（阿部明浩らと共著）
- 2.1982年 2月 「雪遊び、スキー遊び、万一の場合に備えて」『子どもと雪あそび』（日本学校体育

- 研究連合会編)、ぎょうせい、pp.21-27、69-86、89-93 (浅田隆夫らと共著)
- 3.1984年 11月 「小学生冬の林間学校」『雪上活動』(野外運動研究会編)、ベースボールマガジン社、第3章、pp.85-93 (土方幹夫らと共著)
- 4.1987年 11月 「段階別の練習内容、練習隊形、スキー遊び」『スキー教本』(大学スキー研究会編)、杏林書院、pp.155-165 (高村雄治らと共著)
- 5.1987年 11月 「ゼッケンの語源、スキーで出せるスピード、動物の足跡」『スキーテキスト』(大学スキー研究会編)、杏林書院、p.40、42、48 (高村雄治らと共著)
- 6.1988年 7月 「野外活動の概要」『野外活動テキスト』(日本野外教育研究会編)、杏林書院、第1章、pp.2-8 (金子和正らと共著)
- 7.1989年 6月 「キャンプの意義と目的」『キャンプテキスト』(日本野外教育研究会編)、杏林書院、第1章、pp.2-7 (金子和正らと共著)
- 8.1989年 11月 『ティーチング・イン・ザ・アウトドアーズ』(日本野外教育研究会編)、杏林書院、171頁
- 9.1990年 3月 『スポーツ・体育ものがたり6すべるスポーツ』(山本邦夫監修)、岩崎書79頁
- 10.1990年 9月 『水泳の指導』(日本野外教育研究会編)、杏林書院、258頁
- 11.1991年 3月 「初心者指導法、初心者指導における留意事項、スキー教室のねらい」『スキーの指導』(日本野外教育研究会編)、杏林書院、第1章、pp.2-35 (水沢利栄らと共著)
- 12.1992年 4月 「小学校体育科、中学校保健体育科」『環境教育読本』教育開発研究所、pp.222-225、269-273 (阿部治らと共著)
- 13.1992年 5月 『キャンププログラム1』(日本野外教育研究会編)、杏林書院、152頁
- 14.1992年 11月 「スキー技術指導法」『スキーC級教師教本』日本職業スキー教師協会、pp.1-12 (児玉栄一らと共著)
- 15.1993年 5月 「学校での指導方法」『はじめての着衣泳』山海堂、pp.100-121 (荒木昭好らと共著)
- 16.1992年 5月 『キャンププログラム2』(日本野外教育研究会編)、杏林書院、112頁
- 17.1994年 10月 「野外活動」『少年スポーツ指導員／少年スポーツ上級指導員養成専門科目講習会テキスト』日本体育協会、pp.221-234 (日丸哲也らと共著)
- 18.1995年 5月 「着衣泳実技トレーニング」『これ一冊でわかる着衣泳実技トレーニング』山海堂、pp.23-76 (荒木昭好らと共著)
- 19.1995年 10月 「スキー指導の科学」『スキーの医学』南江堂、pp.44-51 (石井清一らと共著)
- 20.1997年 12月 「論文の書き方」『自然体験活動における報告書、レポート、論文の書き方』杏林書院、pp.35-44 (金子和正らと共著)
- 21.1998年 5月 「指導実習」『キャンプディレクター養成テキスト』日本キャンプ協会、pp.210-215
- 22.1998年 6月 「キャンプ場の実態と将来の在り方」『農山漁村の地域活性化方策についての調査報告書』文部省、pp.37-87
- 23.1998年 6月 「着衣泳」中学校体育・スポーツ教育実践講座6:227-234、ニチブン
- 24.1998年 9月 「宿泊を伴うスキー授業」『スキーへようこそ』文部省体育指導の手引き第6集227-234
- 25.2001年 10月 「山陸型の活動、カヌーQ&A」『野外活動—その考え方と実際—』杏林書院、pp.92-95 (金子和正らと共著)



## Ⅱ 学術論文

- 1.1973年 3月 「スキーにおける得意回転方向の決定要因について」(修士論文)
- 2.1976年 3月 「キャンプが自己概念の変化に及ぼす影響」『野外運動研究』(野外運動研究会) 1-1:30-41
- 3.1976年 3月 「一過性組織キャンプ・継続性組織キャンプについての実践的研究」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』24:37-48
- 4.1976年 12月 「組織キャンプにおける登山についての実践的研究」『野外運動研究』(野外運動研究会) 2-1:118-134
- 5.1978年 3月 「ステップ・ターンの指導に関する研究」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』第26巻、pp.117-128
- 6.1979年 10月 「簡易トーチ作製の試み—トーチの照度と燃焼時間に関する実験的研究—」『野外運動研究』(野外運動研究会) 3-1:13-22
- 7.1980年 3月 「雪上林間学校についての実践的研究—雪洞泊について—」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』28:78-85
- 8.1980年 8月 「遠足・林間学校へのアドベンチャープログラムの導入」『学校体育』(日本体育社) 33-10:36-40
- 9.1981年 3月 「雪上林間学校についての実践的研究—イグルー泊について—」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』29:78-85
- 10.1982年 3月 「野外活動が小学生の自己概念の変化に及ぼす影響」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』30:117-131
- 11.1982年 3月 「スキーにおける傾斜錯覚と斜面に対するイメージについて」『福井大学教育学部紀要、学術・体育学(体育学編)』13:3-8(清水史郎、野沢巖)
- 12.1983年 3月 「ゼッケンの語源について(1)」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』32:97-110
- 13.1983年 12月 「花はなぜ美しいか」『教育研究』(不昧堂出版) 38-12:16-19
- 14.1984年 3月 「スキーにおける一側優位性について」『福井大学教育学部紀要、学術・体育学(体育学編)』13:3-8(清水史郎、他と共著)
- 15.1985年 3月 「スキーにおける一側優位性について(2)」『埼玉大学紀要教育学部』第33巻増刊、pp.223-232(清水史郎、野沢巖、他)
- 16.1986年 3月 「スキー指導における〈留まり型指導法〉から〈流し型指導法〉への移行について—滑降時間の測定から?」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』34:83-91
- 17.1986年 3月 「スキーにおける片側偏重(2)—急停止練習が得意回転に及ぼす影響—」『埼玉大学紀要教育学部』第34巻増刊、pp.95-110
- 18.1986年 10月 「スキー指導における急停止練習の取り扱いについて」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』33:105-111
- 19.1988年 7月 「野外活動の企画・運営のあり方」『学校体育』(日本体育社) 41-8:28-33
- 20.1988年 9月 「ストックワークとフォームの再現性について」『野外運動研究』(野外運動研究会) 4-1:14-16
- 21.1989年 3月 「埼玉県の都市部と農村部における小学生から大学生までの1年間の自然体験と生活体験(1)」『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』38-1:99-116
- 22.1990年 3月 「埼玉県の都市部と農村部における小学生から大学生までの1年間の自然体験と生活体

- 験 (2)』『埼玉大学紀要教育学部 (教育科学)』38-2:75-91
- 23.1990年 3月 「友人間のスキー指導の実態とスキー教育の必要性」『野外運動研究』(野外運動研究会) 5-1:16-19
- 24.1990年 3月 「スキー講習がスキーの安全意識と安全行動に及ぼす影響」『野外運動研究』(野外運動研究会) 5-1:20-23
- 25.1991年 3月 「スキーの初心者指導における指導手順についての実践的研究」『埼玉大学紀要教育学部 (教育科学)』40-1:69-78
- 26.1991年 6月 「スキーの初心者指導における指導手順についての実践的研究 (2)」『日本スキー学会誌』(日本スキー学会) 1-1:156-161
- 27.1991年 12月 「大学スキー実習の実態調査結果について」『大学スキー研究会研究報告集』(大学スキー研究会) 2:70-75、(外川重信、野沢巖)
- 28.1992年 3月 「着衣泳指導カリキュラムの検討」『河川親水化と水辺事故防止調査研究報告書—ウォーター・セーフティのための着衣泳』((財)リバーフロント整備センター) pp.126-159
- 29.1992年 8月 「新学習指導要領告示前後における埼玉県の学校スキーについて」『日本スキー学会誌』(日本スキー学会) 2-1:93-103
- 30.1992年 12月 「自発性、自主性を引き出す指導の工夫—スキー—」『スポーツと健康』(第一法規) 24-12:56-59
- 31.1993年 7月 「スキー初心者指導法についての分析的研究—荷重による指導から加圧による指導へ」『日本スキー学会誌』(日本スキー学会) 3-1:187-196 (野沢巖、福島邦男)
- 32.1994年 5月 「楽しい野外活動入門」『体育科教育』(大修館) 42-6:18-20
- 33.1994年 7月 「誰もが安全に楽しく確実に技能が向上するスキー指導について (1)—子どものスキー初心者指導—」『日本スキー学会誌』(日本スキー学会) 4-1:182-188 (野沢巖、福島邦男)
- 34.1994年 7月 「誰もが安全に楽しく確実に技能が向上するスキー指導について (2)—清水理論に捻り戻し理論を加えた指導の試み—」『日本スキー学会誌』(日本スキー学会) 4-1:189-200 (福島邦男、野沢巖)
- 35.1994年 7月 「ゼッケンの語源について」『日本スキー学会誌』(日本スキー学会) 4-1:174-181 (藤原直紀、野沢巖)
- 36.1994年 10月 「スキー初心者指導法についての分析的研究」『日本スキー教師』((財)全日本スキー連盟 日本スキー教師協会) 13:34-39
- 37.1995年 2月 「着衣泳の指導に関する研究 (1)—小学校のPTA活動としての着衣泳指導について?」『野外運動研究』(野外運動研究会) 8-1:21-30
- 38.1995年 2月 「着衣泳の指導に関する研究 (2)—小中学校の体育授業としての着衣泳指導について?」『野外運動研究』(野外運動研究会) 8-1:31-43
- 39.1995年 9月 「誰もが安全に楽しく確実に技能が向上するスキー指導について (3)—上級パラレルターン習得のための指導案の開発—」『日本スキー学会誌』(日本スキー学会) 5-1:79-88 (野沢巖、福島邦男)
- 40.1995年 9月 「大学スキー実習の実態について (その2)—大学設置基準大綱化に関連して—」『日本スキー学会誌』(日本スキー学会) 5-1:156-162 (外川重信、野沢巖)
- 41.1996年 2月 「シラバスに基づいたアルペンスキーの指導」『大学体育』(全国大学体育連合) 57号、pp.15-19

- 42.1996年 2月 「野外運動・野外教育の理念について考える?その指導者の在り方について」『野外運動研究』（野外運動研究会）9-1:5-8
- 43.1996年 6月 「誰もが安全に楽しく確実に技能が向上するスキー指導について（4）—斜面から始めるスキー初心者指導のための指導案の開発—」『日本スキー学会誌』（日本スキー学会）6-1、pp. 148-157
- 44.1996年 9月 「衣服が大学生のクロールと平泳ぎ100m泳のタイムとストローク数に及ぼす影響」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学（Ⅲ））』46-1:69-77
- 45.1997年 2月 「埼玉県の都市部と農村部における小学生から大学生までの1年間の自然体験と生活体験（3）」『野外運動研究』（野外運動研究会）10- 1:19-32
- 46.1998年 10月 「誰もが安全に楽しく確実に技能が向上するスキー指導について（5）—超スキー練習法の特徴について」『日本スキー学会誌』（日本スキー学会）9-1:209-219
- 47.1999年 3月 「着衣泳における救助泳法に関する研究」『野外教育研究』2-2:11-20
- 48.1999年 4月 「大学におけるスキー教育の新しい試み」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学（Ⅲ））』49-1:69-77
- 49.2000年 10月 「日米の国立公園におけるキャンプの比較」『第5回国際キャンプ会議発表抄録集』70-79頁
- 50.2002年 3月 「着衣泳の5つの学習内容についての検討—The American Red CrossとThe Royal Life Saving Society in Australiaの文献を参考として—」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学（Ⅱ））』51-1:137-148
- 51.2004年 3月 「中学生の着衣泳学習におけるラッコ浮き学習、救命胴衣学習、着衣泳法についての一考察」『埼玉大学紀要（教育学部（教育科学（Ⅱ）））』53-1:119-128
- 52.2005年 3月 「集団宿泊的自然体験活動が小学生の自己成長性と自然観に及ぼす影響」『埼玉大学紀要（教育学部（教育科学（Ⅲ）））』54-1:311-322（野沢巖、駒崎弘匡、上園竜之介）
- 53.2008年 3月 「自然体験スクールが小中学生の〈生きる力〉に及ぼす影響」『埼玉大学紀要（教育学部（教育科学（Ⅲ）））』57-1:25-37（野沢巖、駒崎弘匡、上園竜之介、河野裕一）
- 54.2009年 3月 「ライフジャケット体験学習が小中学生の安全意識に及ぼす影響」『埼玉大学紀要（教育学部（教育科学（Ⅲ）））』58-1:57-64